

たろうっこ

大人にも感動を与えた子どもたち

「答志島」からのメール

もう答志島での宿泊体験の余韻はさめたでしょうか。もう話題になることは少なくなつたでしょうか。日焼けの後には落ち着いたでしょうか。

今回の2泊3日の「答志島宿泊体験」は子どもたちだけではなく、それに関わった多くの大人に大きな感動をもたらしました。答志島で私たちの活動を全面的にサポートしていただいた「島の旅社」(以下「島旅」)のしもびーこと下村さんからは次のようなメールが届きました。「子どもたちが何事もなく島を出発してくれて本当にホッとしています。この数日で島の子のようにたくましくなつたし、いろんな体験でイキイキとしているみんなの姿に私たちをはじめ島の人たちも元気をもらいました。宿の女将さんは、太郎生小の子どもたちがルールを守つたり、挨拶ができるようになったり前だけどなかなか出ない行動に驚いていました。島ではやっと片付けが完了いたしました。落ち着いた

ら急に寂しい感じがこみ上げてきました(笑)。素敵な子どもたちと先生と3日間過ごせたことにとっても感謝しています。歌のプレゼントも嬉しかったです。私たちにとってかっただけです。私たちにとって貴重な体験となりました。」

保護者の皆さんも金曜日の夕方元気に帰ってきたわが子を見て、いろんな思いがあつたことと思います。私たち職員も無事に宿泊体験が終わつたことにほっとすると共に、こんな素晴らしい教育活動をさせていただけただけの幸せをかみしめています。

現地での万全のサポート

何度も何度も書いたことですが、宿泊体験が可能となつたのは子どもたち、保護者、そして職員という三者の信頼関係があったからです。でも、それだけではありません。もう一つ答志島での受け入れのサポート体制がきちんとしていたことです。

「豊かな体験活動」という、

文科省(さらに農水省、総務省も)の事業の指定団体となっている「島旅」のことはホームページで知りました。そして、打ち合わせを続け、実施を決めました。基本的には答志島でのすべての活動のサポートを「島旅」がしてくれることになっていました。学校から持つていく荷物も個人的なものだけで、活動のための道具類は必要ありませんでした。

実際に7月8日から活動が始まると、そのサポートは万全でした。万全という意味は子どもたちが活動することと大人が準備することがきちんと整理されており、大人がする準備はスタッフが対応してくれました。全体指揮は「島旅」の「かなちゃん」や「しもびー」が行い、太郎生小の職員は子どもへの個別の対応をすることが主でした。

「かなちゃん」も「しもびー」も子どもたちへの対応が慣れており、名札を見て子どもたちの名前を言いながら、アットホームな関わりを作ってくれました。

私はこれまで修学旅行や社会見学などで旅館や旅行社との関わりを持つてきました。が、「島旅」ほどのきめ細かくて、しかも子ども側に立った対応をしてくれるところ(以下は62号に続く)

